

序 ケアワークの諸相

市野川 容孝

2009年度および10年度の相関社会科学研究室の地域社会論では、2年間にわたり「ケアワークの諸相」をテーマとして、社会調査を実施した。

2000年に導入された介護保険制度を契機に、日本でも介護・介助（ケアワーク）に仕事として従事する人びとの数は増大している。しかし、ケアワークは、共通する部分をもちつつも、利用者が誰なのか（誰がケアの対象なのか）また誰がそのケアの担い手なのか、等によって、さまざまに異なりうる。「諸相」という言葉で私たちがとらえたかったのも、ケアワークのそのような多様性であり、それぞれのケアワークが直面している、それぞれに異なる現状や課題だった。

2009年度の報告書『ケアワークの諸相——東京近郊をフィールドとして』（東京大学教養学部総合社会科学科他、2010年）は、以下の4部で構成されている。(1)「高齢社会における地域介護と介護予防」（東京都北区の桐ヶ丘デイホームの取り組み）、(2)「学童保育の歴史・現状・課題」（東京都内の2つの自治体をフィールドとして）、(3)「介護労働の新たな地平」（在日のフィリピン人、インドネシア人のケアワーカー）、(4)「障害者の自立を支えるヘルパーの労働実態と課題」（ハンズ／ケアズ世田谷に登録のヘルパーの方々に対する、悉皆の質問票調査）。

2010年度の報告書『続・ケアワークの諸相——東京近郊をフィールド』（東京大学教養学部総合社会科学科他、2011年）は、以下の5部で構成されている。(1)「介護保険の中の小規模多機能型居宅介護事業」（横浜市戸塚区をフィールドとして）、(2)「院内学級の現状と課題」（東京都内の院内学級におけるインタビュー調査）、(3)「民間医療の現場から多様なケアを考える」（断食施設「ヒポクラティック・サナトリウム」でのインタビュー調査等）、(4)「日本における外国人ケアワーカーをめぐる現状と課題」（在日のフィリピン人、チベット人のケアワーカー）、(5)「障害当事者から見た介助資格と自立生活」（ハンズ／ケアズ世田谷の利用者9名に対する質問票調査）。

以下に掲載する、野田潤「在日チベット人ケアワーカーに見る異文化間ケアの可能性と制度的・社会的課題」は、2010年度の調査の成果の一つである。